



タンチョウ博士のお話（第21回）

アレ！羽根が落ちた！！

今、宇宙人が舞鶴遊水地にやってきたとしよう。ここで初めて、遊水地を囲む土手の上と、湿地の中にある大型の生きものに会った。

そこで、宇宙人は、2つが同じものか見極めようとした。確かに土手にいる方は頭など大きいけど、両者とも目が二つで、形は違うが口もあり、背丈もまあ同じくらい。しかも、共に2本足で歩き、ほかに同じ大きさで2本足のものはいなかった。

悩んだ末、宇宙人は結論を出した。これは全く異なる生きものだと。なぜなら、土手の生きものは、体の一部を除き皮膚が裸出しているのに、湿地のは、ほぼ全身が羽毛で覆われているからだ。

つまり、トリがトリたる所以は、羽毛という特殊な覆いを持つことにある。もともと、トリの羽毛も、ヒトの毛も、ヘビの鱗も、起源は同じで皮膚の変形だ。

鳥は空を飛ぶため、なるべく空気抵抗を減らしたい。だから、凹凸のある体を羽毛で覆い、全体を流線型にしている。さらに、飛ぶ力を得るには大きな「うちわ」が必要で、重さと強さと大きさのバランスをとり、翼ができあがった。

しかし、翼に使う「風切り羽」は、激しく打ち振るために傷みがひどく、タンチョウは数年ごとのオーバーホールで、一斉に取り換えなくてはならない。これが「換羽」で、抜けてから生え変わるまで2か月ほどかかり、その間は当然飛べない。

舞鶴遊水地に今いるタンチョウ2羽は、名札がついてないので断定できないが、恐らく昨年よく見かけた個体と同じだろう。うち1羽（オス）が3歳の誕生日を迎える昨年5月に換羽を始め、7月に完全な成鳥の装いになった。

もう1羽はメスで、今年の5月で2歳になったばかりだ。ところが、5月末に彼女の翼から、大きな羽の落ちるのが目撃された。こうして換羽がはじまり、7月初めに再び羽が生えそろう飛べるようになった（写真①）。



写真①舞鶴遊水地で今年換羽を行い、再び飛べるようになった2歳のタンチョウ（メス）
（令和元年7月1日 撮影：正富宏之）

道央圏には、先輩としてむかわ町で繁殖しているタンチョウの番いがある。このうち1羽が今年6月に換羽の時期を迎えた。いつもなら、営巣地から離れた水田で餌を探すのに、今年はヒナを連れていないせいか、巣のある湿地へ戻って暮らしている。飛べない鳥は安全が第一だから、営巣地が一番安心できる場所なのだろう。

逆に言うと、換羽のときに暮らすところは安全な場所であり、そこに巣を造る可能性が高いことを示すわけだ。舞鶴遊水地でここ2年続けて換羽が起き、その間、遊水地を離れずに過ごした。しかも2羽とも来年は繁殖できる年齢となる。

来春へ向けての期待は大きく膨らむし、それを裏切らないためにも、2羽が安心して過ごせるよう、これからも町民全員でしっかりと見守りを続けよう。（文：正富宏之）